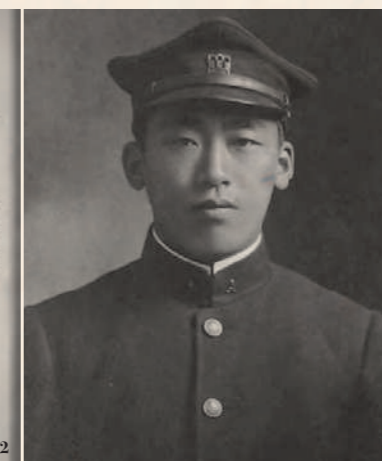
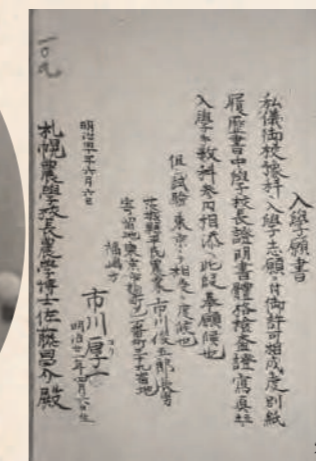


挑戦の150年

SCENE-20

1907-46

「待望の獣医学研究者、市川厚一」



1. 農科大学を卒業したころの市川厚一 (1913年)
2. 市川厚一の東北帝国大学農科大学予科入学願書 (1907年)
3. 加藤泰治助教授 (1912年ころ)
4. 小倉鉦太郎教授 (1912年ころ)
5. 市川厚一が学んだ畜産学教室 (1912年ころ)
6. 加藤泰治助教授による獣医学実習 (1912年ころ)
7. 北海道帝国大学農学部畜産学科の職員・学生 (1935年) 最前列右から2番目に座っているのが市川厚一教授
8. 東京帝国大学医科大学 (1913年ころ) 市川が出入りした病理学教室は右手前の建物
9. 札幌農学校で獣医学を教えたJ.C.カッター (1880年ころ)



北大初の学士院賞

日本学士院（戦前は帝国学士院）が優れた研究成果を表彰する「学士院賞」は、日本の研究者にとってはノーベル賞と並んで權威ある賞である。北海道大学在籍者では、戦前・戦後を通じ、二十四名が受賞している。その最初の受賞者が、一九一九年に「癌腫ノ人工的発生研究」で東京帝国大学医学部教授山極勝三郎と共同受賞した市川厚一である。当時、市川は北海道帝国大学農学部畜産学科講師に就任したばかり、三十一歳の若い研究者であった。

東京で指導を受ける 札幌の大学院生

市川厚一（二八八八〜一九四八年）は、一九〇七年、札幌農学校が東北帝国大学農科大学（現在の北海道大学農学部）として大学に昇格した年に、予科に入学した。予科終了後、一九一〇年に本科に進学し、畜産学科に籍を置いた。一九一三年七月に北海道の家畜の寄生虫をテーマとしたドイツ語論文を提出して、卒業した。卒業後、市川は助手となって大学に残り、上京して東京帝国大学医科大学（後に医学部）病理学教室に入り、山極勝三郎教授の下で癌腫の人工発生の研究に取り組んだ。

一九一三年十一月に市川は東北帝国大学農科大学の大学院に出席した。研究課題は「病理学一班、殊ニ腫瘍発生ニ就テ」であった。十一月十一日の農科大学教授会で市川の出願を協議した際、畜産学科小倉鉦太郎教授は、市川が東京帝国大学医科大学の実験室に出入りしていること、大学院入学後

獣医学博士授与の実績がなかったため、文部省に可否を問い合わせた上で、三月四日の教授会で授与を決定している。北大初の「獣医学博士」である。直後に市川は畜産学科の講師に就任した。

癌腫発生の研究への取り組み

この間、市川厚一は山極教授との共同研究で、ウサギの耳にコールタールを塗擦して人工的に癌腫を発生させることに成功し、一九一五年九月、東京医学会で報告した。世界初の人工癌である。この研究は学士院賞を受けたばかりでなく、山極が後に、数回にわたりノーベル生理学・医学賞の候補となったように、海外においても高い評価を受けた。

同時期に山極教授門下であり、後に北海道帝国大学医学部産婦人科学講座教授に就任する大野精七は、「市川君は山極先生の指

る事が癌の予防上にも極めて大切な事であります 此の私等の実験は蓋し其事実がある性質のものであるかを追究しやうとしたのであります」（市川厚一編『癌は治る・手後れするな』）

「癌を起す刺激はどう云ふものであるかを探求するかないか又癌を作る刺激となるものが如何なる

も少なくとも一年間程度は東京で指導を受けさせたいことなどを説明した。札幌の大学院に籍を置いて、実際には東京帝大で指導を受けることに反対する意見もあったが、結局、大学院入学を認め、正式に東京帝大医科大学長宛てに市川の指導を依頼する手続きを取ることに決定した。大学院生に対する処遇として異例であった。

北大初の「獣医学博士」

市川に対する厚遇には大きな理由があった。

北海道の農業政策では家畜を利用した畜産業を推進し、札幌農学校はそのための人材養成を担った。従って、獣医学の専門家の養成は、札幌農学校の重要な課題であった。実際に、札幌農学校開校から三年目の一八七八年にはアメリカ人医師J.C.カッターを招聘して、動物学や獣医学を講義させた。また、カッターの教えを受けた第二期生南鷹次郎は、札幌農学校卒業後、獣医学研究のため東京大学へ留学をしている。しかし、南は札幌農学校教員となった後、農学校の農場監督と広範な農学の講義のため、獣医学を専門とすることができなかった。その後も自前で獣医学専門家を養成することはかなわず、いずれも後の東京帝国大学となる駒場農学校出身の須藤義衛門、帝国大学農科大学獣医学科出身の小倉鉦太郎のほか、カナダ・マギル大学出身の加藤泰治などを獣医学担当教員として招いていた。

それだけに、獣医学研究者への道を歩もうとする市川厚一への期待は大きかった。一九一九年、市川から「獣医学博士」の学位申請を受けた北海道帝国大学農科大学は、導のもとに、忠実に根気よく連日実験を続けられた。ウサギを持ちながら教室内を歩いたり、昼食後の娯楽の場所まで持ってこられた君は、エゾ熊と言われるほど、あかだらけも無頓着に、ほとんど兎と同棲して実験され、本当に人間ばなれた方だった」と回想している。市川自身は、ウサギの耳にコールタールを塗れば癌は必ず発生するとの信念で「動物が死ぬまで私共の命のある限りやってみよう」と決心していたという。

その後、市川は助教授、教授と昇進し、農学部比較病理学講座を担当した。市川が進めた癌腫発生に関する研究は、家畜を対象とした獣医学であると共に、人間の癌の仕組み・予防・治療に関する医学にも貢献する成果であった。一九二九年、市川は、医学部教授や札幌市立病院医師と共に「北海道対癌協会」を設立して初代理事長に就任し、癌予防・治療の啓蒙活動も行っている。



- 1907年 9月 - 東北帝国大学農科大学予科に入学
- 1910年 7月 - 予科卒業、9月に本科入学
- 1913年 7月 - 東北帝国大学農科大学畜産学科を卒業
卒業後、副手となる
東京帝国大学医科大学病理学教室（山極勝三郎教授）に出入り
- 11月 - 東北帝国大学農科大学の大学院に進学
- 1915年 9月 - 東京医学会で山極勝三郎と共に「人工的癌腫の発生について」報告
- 1919年 3月 - 北海道帝国大学から獣医学博士号を授与
北海道帝国大学農学部畜産学科学講座に就任
- 5月 - 山極勝三郎教授と共に学士院賞受賞
- 1920年 1月 - 北海道帝国大学農学部助教授
- 1925年 8月 - 北海道帝国大学教授
- 1929年 9月 - 北海道対癌協会設立、初代理事長に就任
- 1930年 10月 - 市川厚一編『癌は治る・手後れするな』（明文堂）刊行
- 1946年 3月 - 北海道帝国大学退職

大学文書館 だいがくぶんしょかん Hokkaido University Archives
北海道大学に関する歴史的な資料を収集・整理・保存して利用に供するとともに、北海道大学史に関する調査・研究を行っている。